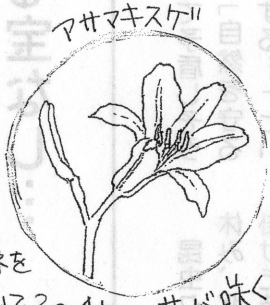
われもこう 第26号

2009年2月6日 発行

山野草育ては根気です！

何しろ種を播いてから花が咲くまで数年かかるものがほとんどですから。それでも軽井沢にもともとあった花でしたら育てやすいし、大きな株に育ったらほとんど手がかからなくなります。



タネをまいて3〜4年で花が咲く。

直播きすると せっかく発芽しても雑草だと思って引っこ抜いたり刈りこんだりしがち。だから種はポットに播くと間違えません。ある程度育ったらその植物に合った場所へ植え代えます。

キツリフネ。しめり気のある所で増えていく。

軽井沢の町花
サクラソウ

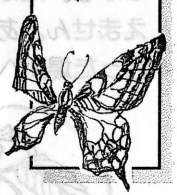
マツムシソウは発芽して2年めに花が咲く。

ヤマホタルブクロ

また、われもこうの会では、「原っぱ」や会員の自宅の庭で増やした山野草の苗をお分けしてます。それを植えれば、その年または翌年には花が咲くので、山野草初心者におすすめです。

実物に勝る宝なし…

栗岩　竜雄



写真をかじる者として矛盾しそうなタイトルですが、「自然を守る…」、「自然を大切にする…」ということは、理屈や押し付けではなく、携わる人の内面から湧き上がる実感が伴ってこそ、意味を持つと思います。その実感には、子供の頃の体験が大きく影響し、大人になってからの活動へつながって行くと感じます。

思い出話になりますが、私が蝶に関心を持ち始めたばかりの小学四年生の時、まだ実物をろくに知らず、手元にあった図鑑のイラストを見ては、「きっと日本のどこかにこんな蝶がいて、小学生の僕じゃ手が届かないんだ…」と、憧れの念でアゲハチョウのページを眺めていたことがありました。

昆虫クラブ員になって初めての夏休み、北信地方にある親戚の家へ出掛けた時。小学生には不釣り合いな大口径の捕虫網を無我夢中で振り回し、近くの畑を飛び交うキアゲハを捕まえました！その光景は今も鮮やかに脳裏に焼き付いています。「うわぁ、本物だぁ！」「図鑑の絵はウソじゃなかったんだぁ！」「黄色が派手だから、きっとキアゲハだぞ！」最大のインパクトは、予想以上に大きな蝶だったこと。「すっげぇデカイんだ！」

あれから三十五年…。キアゲハ自体の開長は変わりませんが、乗せた手のひらが変わりました。それは子供の頃の小さな手だったからこそ味わえた喜びで、大人になってから同じことをしても、感激は薄いような気がします。

ところで今、捕虫網を持って昆虫採集する子供の姿を、あまり見掛けなくなったと思いませんか？麻ひもで肩から下げた三角ケースを、パカパカ揺らしながら走る少年は、軽井沢でも絶滅してしまったのでしょうか？昔とは比べ物にならないぐらい、環境への意識は高まっているのに、後を継ぐ子供たちが、自然との触れ合いをしなくなったように感じます。そこには虫を採る行為が、逆に自然を傷付けると誤認した大人たちの、歪んだ意識が見え隠れします。確かにコレクション目的で過剰なハンティングを行なうマニアはいます。特定の種に執着し、成虫のみならず幼虫から食草まで、根こそぎ持ち去る悪質な業者もいると聞きます。しかし子供が夏休みの課題で採集する程度で、昆虫が絶滅に追いやられることはありません。言いたいのは、昆虫採集はむしろ環境教育の入口だということ。心優しい最近の大人たちは、虫を捕まえている子供

を見ると、「一寸の虫にも五分の魂…」とばかり、放してあげることを勧めます。自然界にいる者から自由を奪ってはいけない、その命を殺してはいけない、そうやって実物に触れる機会を子供から離してしまう…。幼い頃にしか作れない大切な思い出が、泡と消えて行く…。あの時私がキアゲハの採集を「悪」と教えられていたら、今この原稿を書ける人になっていなかったのに…。

虫を捕まえ、時に殺し、針を刺し、展翅板に乗せて標本にする…。その場面だけを見ると残酷な気がします。標本にしないまでも手で虫をいじっているうちに、翅がちぎれ、脚が取れ、触角が折れ、やがて衰弱して捨てられます。クモの巣にわざとトンボを引っ掛けてみたり、アリジゴクにアリを落としてみたり、可哀想としか思えないことを、子供の頃は平気でやったものです。私の場合は蝶でした。

子供にとって単なる遊び相手でしかない虫たちに、大人になってから触れようとした時、どこを持てば暴れないか？どう押さえれば安全か？どの程度の力なら衰弱させずに済むか？手加減の仕方がわからず、まるで腫れ物に触るかのような経験をしたことはありませんか？一見残酷に見えた子供の遊びからも、学ぶことは多いのです。そこにいる虫を短絡的に守ろうとした結果、長期的な視野を欠いては自然保護の芽は育ちません。

情報網の発達に伴い、実物に触れずとも知識だけは豊富に得られる時代になりました。それで自然が守られるなら大いに活用すべきでしょう。ただ私が望ましいと思うのは、実物に触れることでしか分からない「感覚」だとか、「知識以外にも大事なもの」がたくさんあって、それはテストで求められるような一瞬の結果ではなく、十年後二十年後、あるいはそれ以上の月日を経て、思い出という宝物になって初めて現れる結果であり、そこへ科学的知識が噛み合って、自然を大切にする理由と原動力になってくれたら…ということです。その大前提として子供の頃の虫採り体験は有用で、大人はそれを教えるのではなく、それが出来る環境を整えれば良い…と思います。

栗岩さんが撮影・厳選した写真が
ポストカードになりました。
軽井沢の自然 Season 1 高原に集う蝶たち
Season 2 山麓創世
４枚組封筒入り　各４００円
≪われもこうの会でも取り扱っています≫
＊　＊　＊
軽井沢の蝶を詳しく知るなら
栗岩さんのホームページへ
http://www.h2.dion.ne.jp/~lev.1000

富弘展と野の花

とみひろを囲む会　塩崎静江

昨年の夏、星野富弘『花の詩画展』が軽井沢で行われました。都会から来たお客様、又今では長野県内でもなかなか見ることのできないワレモコウ、オミナエシ、ホタルブクロ、ユウスゲ等々。来場者の方々は感激し記念写真を撮る方、花の名前を聞いてくる方等、ボランティアのスタッフとの交流も花を通して深くなっていたように思われました。

これらの花たちは会場近くの「市村の原っぱ」からわれもこうの会の方々が移植して下さったものです。「こんな活動があったの？」と言って多くの方が会場内に置いてある冊子『われもこう』を手にとり嬉しそうに帰られたのを昨日の事のように思い出します。

ユウスゲはその名のとおり夕方に開いていくのよ、と一緒に来ていた友人に語りかけている姿もみられました。

われもこうの会の皆様のおかげで大変素晴らしい会場入り口の雰囲気作りができました事を、心から感謝致します。終了後の花たちはボランティアの皆様で分け合い、今夏は各々の地域で元気に咲いてくれる事を期待し楽しみにしております。

この本おすすめ？

『いのちをはぐくむ農と食』

小泉武夫　著

岩波ジュニア新書　二〇〇八年

ちょっと小太りで、よくテレビに出ている小泉武夫先生をご存じの方も多いと思います。軽妙なごちそうに関するエッセイも有名で、先生のおすすめ料理で我が家の定番になっている献立もいくつかあります。

そんな先生が、若者のために心を込めて書かれたのが、この本です。医師国家試験を受けてお医者さんになる人（六三〇〇人／二〇〇六年）より、農家の後継者（五〇〇〇人）のほうが少ない日本の農業に対する危機感がひしひしと伝わってきます。

ヨーロッパでは、国の税金は、国民の安全や快適な生活を保障するために使われるべきで、国防より大切なのは、国民の命そのものを守ること、すなわち食料を確保することである、国民の生命線を農家が守っているのだから、その農家を守ることが税金の大切な使い方であると解釈し、農業保護のための手厚い補助金制度を実施しているのだそうです。

私は、里山や里地の自然環境が危機的な状況にあり、また安全な食に関する関心の強くなっている現在、農業を守ることは第一に大切なことだと思っています。これは、人間だけでなく農業活動と結びついて永い間共進化してきた日本の生物たちの命を守ることでもある、と思っています。どこかの国の、新幹線や高速道路つくりにだけ熱心な政治家先生たちに、是非読んでいただきたいものです。軽井沢図書館にあります。（X）

森の記憶

数年前の初夏のころの話ですが、いつもの通り愛犬「イガ」と近くの森を散歩をしながら、この時期は片手に紙袋とトング（ハサミ）を持って木から落ちた青い胡桃を拾い集めるのが日課になっていました。染織を生業としている私は染色に使うための青い胡桃の実を拾い集め、庭の一画に作った窯に乗せてある大釜にその実を入れ、近所の工務店の方の協力で頂く、木材の端材を燃やし、ぐつぐつ煮出した液で糸を染め上げます。糸は絹糸が主で絹のもつセリシンという物質が胡桃のタンニンとくっ付き染まります。昔は黒色の染料として使われたそうです。私は鉄で媒染（発色と定着）してこげ茶に染めます。それをストールやインテリアの布に織って作品にしています。

いつものように散歩をしながら青い胡桃を拾っていますと、頭の上から胡桃の房のかたまりが落ちてきました。胡桃が4つほどついたかたまりでしたから結構な衝撃が頭に走りました。「痛い！」とおもった瞬間「胡桃をみつけた！」と思い浮かぶのは悲しい性分です。上を見上げると梢伝いにリスが私を見下ろしながら走って行きました。私は頭をさすりながらその胡桃をひろって袋に入れたのですが、走って行ったリスのことが気になりました。どうもわざと私の頭をめがけて落としたとしか思えなかったのです。きっとリスは「私の大事な胡桃を取らないで！」と言ったのかもしれません。その事件（？）以前は青い実のまま胡桃を煮出したが、今は青い果肉だけを取り煮出し、種の部分の胡桃は残して、我が家に来る冬のリスの餌にしています。それは手間のかかることですが、頭に受けたリスの「メッセージ」を受け止めてしまったので今も続けています。

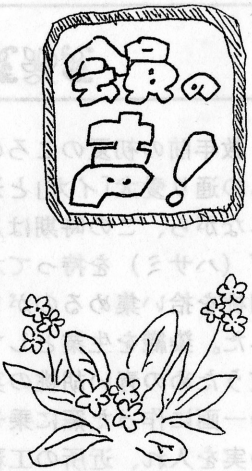
しかし、最近、とても心配なことがあります。散歩の時や、庭に遊びに来ていたリスの姿がめっきり少なくなりあまり見かけなくなりました。庭で愛犬「イガ」のウールの敷物の端を引きちぎって口いっぱいに含み、引っ張っていく愛らしい姿や、木の高い所に作った巣をそっと望遠鏡で覗いたら２匹が並んでこちらを見ている様子など見ることができなくなりました。いつのまにかに散歩コースにしていた森の小道はコンクリートの道になり、あっという間に森が宅地に姿を変えました。

あの森にあった胡桃、栗、キハダ、夜叉ぶしは植物染めに適した木でした。あの森にいたリスやシカやキツネはどこに行ったかと思うと胸が痛みます。消えていった森をみて私たちは「また家が建ちますね」と言って立ち話をしているだけでいいのでしょうか。ただ消えていく森の成り行きを見守るだけでいいのか考えてしまいます。

森の記憶が少しずつ消えようとしています。

Workshop　2bits

飯田竜子（いいだ りょうこ）



●小さくて大きな驚き

芽吹きが勢いよく緑にかわる頃、六四年の月日が驚きになりました。昨年われもこうの会に入れて頂いた頃のことです。ふと話したことにYさんがおっしゃいました。その花って、るり草じゃないかしら??まだ咲いているからと見に連れて行って下さいました。六四年前、軽井沢の駅周辺に咲いていた青い小さな花、幼かった私（今はババそのもの！…笑…）は母から忘れな草と教えられたことを覚えてました。長い間、忘れな草とばかり思っていた私は昔の軽井沢を懐かしみました、駅、家並みは白黒なのに、花々はカラーで記憶に残っています。子供ながら自然の美しさをしっかりと目に写し取っていたのでしょう。今思うこと、花の好きだった母からの贈り物だったのでしょうか！！忘れな草に加えてるり草に会える時季を待つ幸せを手に入れた私です。

北島裕子

●二〇〇八年我が家の動物騒動記

①ウワミズザクラの幹に　クマの爪痕発見！

実を取りに登って行った時の四本の爪痕と、下って来たときの二本の長い爪痕が並んでいた。下りの二本は体重を片足だけにかけて滑りおりたためか?と推測した。

②大きなサルが網戸を　破っているところを発見！

台所のハメ殺し状態の網戸を開けて侵入しようとしている大きなサルを見つけ、必死に追い払う。網戸には小さな穴が残った。

③ムササビの巣に　スズメバチの巣を発見！

木に据えたムササビの巣箱からムササビが出入りしなくなったので、後日、箱の中を調べたところ、なんとスズメバチの巣が上部に納まっていた。まことに芸術作品と呼べる美しい造形であった。

④朝、庭にカモシカがいるのを　発見！

今回でみつけたのは三回目である。

軽井沢では珍しくもないかもしれませんが、動物と共存する生活を実感しています。

洋子

14×24

●はる待つ庭師の心

軽井沢に居を構えて五年余りが経過した。庭いじりをしていると、朝六時から夕方暗くなるまで時間を忘れて夢中になっているが、これが人生一番のストレス発散の場である。しかしゴルフもそうだが、上手くなってくるとその日の出来不出来で、遊びがかえってストレスの原因になって来る。今、私は庭作りの壁にぶつかっているような気がする。がむしゃらに植物を植え込んで来た時には感じなかった不満を最近感ずるのである。庭に生えている植物の種類は、植え込んだものと自然に飛来して来たものを含めて草本類で一四一種、木本類で六九種の合計二一〇種が数えられている。以前住んでいた千葉県の房総半島は、北方型の落葉広葉樹林帯と南方型の常緑広葉樹林帯の接点と言われており、多様な生物種の宝庫とされている。庭樹作りも盛んで、イヌマキ等は海外にまで輸出するほどに一大産業になるべく頑張っている土地柄であり、そこから軽井沢に移入した植木もある。しかし自然環境の違いから、一年で枯れてしまったサザンカやキンモクセイ、ひと冬は越えたものの二度目の冬の寒さで枯れてしまったミツマタ等と実験の繰り返しで、ようやく生育環境から見て安定できる植物種が見えて来た様に思える。以前この紙面でも紹介したが、秋田にいる母が山野草好きで、その影響からか私も軽井沢では山野草を中心とした庭作りをやって来た。会員から頂いた、サクラソウを始めとする可憐な花びらを持つ山野草には何とも言えぬ愛くるしさを感ずるが、咲いている期間は短くその姿も概して品よく派手さはない。また一年を通して見ると、庭としての輝きを見せている期間は限定的で、時には花の輝きを全く失う時期がある。この時期が何とも寂しく不満なのである。草花の咲く時期と彩りを上手に組み合わせて行けば、在来の日本種の山野草でも十分に楽しめる庭作りが出来るのであろうが、今の私には、洋花を少し混ぜ合わせた中での彩がどのようになるかに関心が向いている。概して派手な色合いで、咲いている期間も長い洋花は正直言ってあまり好きではないが、憧れの北欧辺りの草花には、キット気に入った彩もあるのではないかとの好奇心が湧いているのである。いろんな経験を重ねて見たら、ヤッパリ在来種の山野草が一番良いという結果になるのではないかと思ってはいるが、当面は洋花に浮気をして見たいとの欲望が先行しているのである。われもこう主催での庭作り講習会のようなものが計画されると素晴らしいと思うのであるが、当面は自己流で進むしかない。春よ来い、早く来い。庭の改造がまた始まる。

二〇〇九・一・二一　記

大槻　幸一郎

野の花を増やす会　われもこうの会　会員募集中！

空地に花を！

春から秋にかけて月２回、空き地で野の花の世話をします。昔、軽井沢でよく見かけた花、今ではあまり見かけなくなった花を育てています。

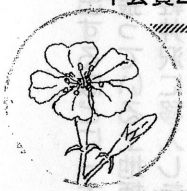
子供たちといっしょに。

小学校のクラブ活動（軽井沢自然クラブ）に参加しています。校外へ出て自然散策するといつでもなにかしら発見があります。

会員同士の交流会

昨年は、蕎麦打ちやクリスマスリース作りの教室を開きました。

年会費2,000円（65才以上は500円）です。お問い合せは、下記事務局まで。



われもこうの会

2008年度総会のおしらせ

＜日時＞　３月１日（日）午後１時３０分～３時３０分頃まで
＜会場＞　中央公民館　２階　第３会議室

◆会場準備のお手伝いをできる方は１時１５分頃おいで下さい。
◆昨年収穫した野の花の種をお分けします！

われも券の使用期限がせまってます！

お財布やひきだしに使い忘れのわれも券がありませんか？
３月３１日までにお使い下さい。

編集後記

第26号発行にあたって原稿を募集したところ、たくさんのお便りをお寄せいただき、ありがとうございました。「われもこう」誌面が会員の交流の場になって、さらに活動の輪をひろげていけたらいいですね！

ホームページもご覧ください
http://www.h5.dion.ne.jp/~waremoko/

発行/われもこうの会　　事務局　TEL・FAX/　0267（46）2505